わたしはわたし　誰にも属さない

南アルプス市立甲西中学校三年　福島　瑚雪

　休み時間、教室の片隅にたった一人、うつむき椅子に座っている子がいる。さて、あなたはこの状況に何を想像するだろうか。
「友達がいない」
「いじめられている」
「何か辛いことがあった」
このように見える人が多いだろう。だけど私は違う。もちろん悪いことも想像するけれど、もしその子が「寂しそう」「辛そう」な顔をしていないのなら。
「一人の時間を楽しんでいるんだろうな。」と思う。本人は一人でいることを気にせず、自分の過ごしたい休み時間を過ごしている。そんな場面でもあるのだ。
　あなた自身は誰かと一緒にいない一人の状況を『独りぼっち』『寂しい』『恥ずかしい』『気まずい』事と考えてはいないだろうか。携帯電話の画面を見ていなければ潰せない時間を過ごす時もあるだろう。私があなたにこのような質問をしたのは、これまでにあった自分の経験があるからだ。
　小学生の頃、先生からかけられた言葉。
「いつもひとりでいるね。どのグループにも入っていないけど悩みでもあれば何でも話してね。」
私は思いもしなかったことを聞かれ、驚いた。それと同時に多くの生徒がいる中、先生が私のことを気にかけて心配してくださったことに嬉しさを感じた。私にとって授業以外の時間は図書館に行き、外で遊びたければ学年、男女関係なくその場にいる子と遊ぶ。『グループ』に入ることを必要としていなかったし、それより自分の好きなことをして過ごす。それが普通の日常だった。先生からの言葉がもやのように心の片隅に残ったまま、家に帰った。夕食のとき、なんとなくこの出来事をお母さんに相談した。
「学校はグループに入ることが普通なの？なぜ一人で行動していると心配されるのかな。」お母さんは何も心配していなかった。
「自分が快適だと思う方法で過ごしてればいいんだよ。グループに入らなくても、友達がいたらいいし、ひとりでも楽しめるならそれでいいじゃない。あなたはあなたであって、どこにも属さない人間だから、これから先だって自分で考えて行動しなさい。」

とお母さんは言った。その言葉を聞いた私は、安心して眠りについた。しかし、それまで気にしていなかった何気ないことを、この日を境に意識するようになってしまっていた。グループに入っていないことで、こちらから話しかけても話してくれない子や異性と楽しそうに話しているだけで同性の子から悪口を言われたりもした。それでも、私は自分の居心地が良いと思う方法で学校生活を過ごすことを選択した。

中学生になると、他の小学校から来た新しい友達が沢山できた。考えは人それぞれ、面白い仲間が増えていった。ある日ひとりの女の子が私に声をかけてきた。

「なんで、たまにひとりでいるの？仲良しの子は？」

と聞かれた。私は自分の考えをしっかりと伝えた。

「私は一人でいることを気にしてないよ。そのことも理解してくれる友達がいて一緒の時間を過ごせるなら楽しいよね。」

小学校から続く日常は、私にとって普通になっていた。

「そうだね。私も一人で過ごす時間が好きだよ。人に合わせることが辛いこともあるよね。」

と、その子が言った。はじめて同じ考えの子に出会った。それから、私はその子と少しずつ話すようになった。友達になり、お互いを尊重できる関係は私を成長させてくれた。私達はそれぞれの違いを受け入れ、自分たちの好きな方法で過ごしてた。それが当たり前となった時、私は初めて「グループ」ではない親友ができたのだ。今、私のことを理解してくれる仲間と毎日過ごす時間がとても心地が良い。

私たちの生活には、誰もが自分らしく生きることができる権利がある。人は誰もが違った考え、好み、見た目をもっている。その違いを理解し、尊重しなければならない。もちろんわたしも「グループ」に入っている子を否定はしない。自分が違うことを認め、他人が違うことも認め、お互いに受け入れることがすべての人たちが心地よい人生を送るために大切なことだと思う。友達と仲良くすることが普通でも、ひとりで楽しむことが好きな人もいる。たったそれだけの事だが、その違いを尊重することが、人権を守る第一歩につながっていると思う。